

ナラティブを用いた学習言語の評価と指導法の開発Ⅱ：書字言語への般化を目指して

-思考・学習のための言語習得に躓いている子どもの早期発見と支援のために-

入山満恵子(新潟大学 教育学部 准教授)


ナラティブ活用の意義—前年度までの実践と今回の取組

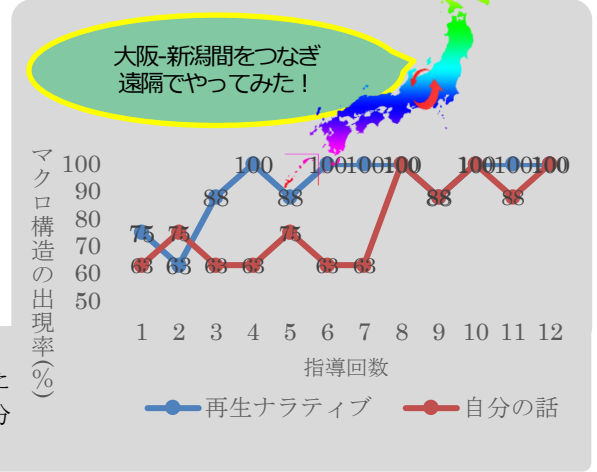
本研究では前年度に引き続き「ナラティブ」を用いた言語評価、指導法の開発に注力した。ナラティブは幼児期後半から発達する学習言語のひとつと位置付けられ、近年特に英語圏では評価法や指導法に広く活用され、多くの効果が報告されている。また注目すべき点は、「話しことば」であるナラティブの力が伸びると、その効果が「書字言語」にも般化される、との点である。つまり、学童期に求められる作文や要約の力は、単に機械的な繰り返し練習やプリント学習で伸ばすことはできず、まず「しっかりと話しことばの土台」を作ることが早道といえる。前年度実践ではそのための手段のひとつとして、「おしゃべり NaBi®シリーズ5枚絵指導」を開発した。継続助成では、この指導法の更なるブラッシュアップと、前年度実践では検証ができなかった「書字言語への般化」に焦点を当てて実践を進めたが、本稿では①ブラッシュアップ：Web版の開発、②書字言語への般化の検証の2点を取り上げ報告する。

①ブラッシュアップ：オンライン、付箋に子どもの発話を書く際の時短のために「パワーポイント版5枚絵指導」を作成！

- ・前回実践にて多くの意見(=「付箋への記入が大変」「記入に時間がかかる」「遠隔でもできる方法を」等)に応えるためPCやタブレット上で使用できる、紙ベース教材に準じたパワーポイント版教材を作成
- ・対面でもPC画面が「ホワイトボードがわり」になる(=子どもの発話の入力がラク&時短に！)

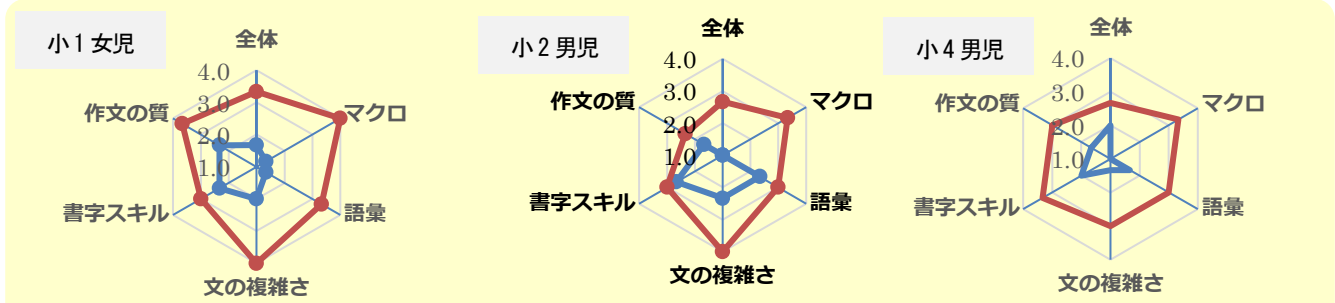
- ★お話を読み聞かせ時はアイコンをタイミングに合わせて出せる仕様
- ★パワーポイント編集画面で子どもの発話は即時入力可能
- ★パワーポイントなのでオンライン(zoom)での遠隔指導でも活用可→ホワイトボード版とは異なり、「前に話したこと」を比較することはできないので提示に工夫が必要





- ・週1回全12回 対象児とは一度も対面せず評価・指導を実施
- ・指導を通して話せる内容が確実に増え(右グラフ)、周囲の評価も向上した
- ・話を聞いて再生する「再生ナラティブ」の上達が早かった一方で、「自分の話」への般化には時間がかかることも分かった→今後も検証が必要

②書字言語への般化の検証：ナラティブ指導における書字言語の般化を検証するため、参加者26名の中から3例のナラティブ指導前後の「書きことば」の変化に着目した(3例とも通常学級在籍で言語通級指導教室を利用中)



*得点が高い(=正六角形に近い)ほど作文評価は高い。グラフの青線はナラティブ指導前、赤線は指導後

- 1)どの子どもたちも話しことばに困難さがあるため、特に指導前では「作文は書けない」「書ける量が少ない」などの問題は抱えていた。そのため3例全て、ナラティブ指導前の作文の全体量は4, 5行程度にとどまりかなり少なかった。したがって評価するにも「評価できない(=評価の判断をする材料の不足)」に該当する項目が多かった。
- 2)指導後では3例とも、書ける量が増え、特にお話を構成する要素を示す「マクロ」での伸びが大きかった。
- 3)今回設定した作文評価項目は、今後も妥当性等の検討が必要ではあるが、学齢期子どもたちの作文指導にあたりこれらの項目を評価に導入することで「現時点でできることは何か」「どの領域ができていないのか・苦手なのか」などの実態把握がしやすくなる可能性が示された→やみくもに書かせるのではなく、効率的な指導に繋がられる
- 5)作文課題であっても「書かせる」前に口頭でどの程度言語表現ができるのかを把握し、まずは話に必要な構成要素が順序立てて表現できること、そしてそれを書字言語につなげることが重要と考える。(梅田昌子、瀬川幸子、谷川美記子、松浦千春)